

研究ノート

実践報告「震災遺産と問い」

関谷央子*・筑波匡介**

1. はじめに

令和3年度 冬の特集展「そなえの芽 災害から考えるあしたの暮らし」(令和4年2月11日～3月27日)において実施した防災教育ワークショップ「震災遺産を活用した授業づくり」(オンラインで実施)において、学校教員、教育関係者、博物館関係者から参加いただき、そこで得た成果等を報告する。

自然災害が多く発生する我が国では、地域や学校での防災教育が重要視されており、文部科学省や内閣府などの国の機関も力を入れて全国での防災教育を推進している。福島県では2011年3月11日に起きた東日本大震災による爪痕が今も残されており、震災による教訓を次世代の子どもたちにどのように伝えていくのが課題となっている。

そこで、福島県立博物館で所蔵している東日本大震災を伝える資料(以下「震災遺産」)を活用し、子どもたちに震災について伝え、さらに子どもたちの防災意識を高めるために、どのように震災遺産を活用すべきかを考えた際、「問い」が震災遺産と子どもたちをつなぐ大きな役割になるのではないかと考えた。これは以前、筆者がいわき市観光物産センター「いわき・ら・ら・ミュウ」を訪れた際、2階部分にある「ライブいわきミュウじあむ」の展示スペースで東日本大震災での避難所生活を再現した展示資料を見学した際に着想を得たものである。その展示には、「みんなで考えてみよう あなたは今日なにを食べましたか?残さず食べることができましたか?明日はなにを食べますか?」といった見学者に対する問いかけ文があり、その「問い」によって自分自身の生活と自然災害を結びつけ、災害に「わがこと感」を持つことができるのではないかと考えた。このように展示資料に「問い」を追加することで、自然災害を過去に起こったこととして捉えるだけでなく、今後自分の身にも起こるかもしれない出来事であると認識し、その「問い」をきっかけに自身の日常生活をふりかえることで、防災意識の向上につながるのではないかと感じたからである。そのため、震災遺産を防災教育資源として活用すべく、子どもたちの震災への意識、防災力向上をねら

いとした問いづくりワークショップを実施することとなった。

特集展「そなえの芽」は副題として「災害から考えるあしたの暮らし」とした。東日本大震災を伝える震災遺産を活用した「そなえ」を考える展示である。「いつ」「どこ」で発生するかわからない災害に対し、普段の生活の延長にある「いざ」という時を想像し、みなさんの生活に少しだけ「そなえ」を意識してもらい、生活を見つめなおすきっかけとなることを目指して、防災について来館者みんなで考えられるものを意識した。特に学校教員が授業を行う際の参考になればと、実際の授業でも使えるよう関連行事にも体験できるワークショップを準備した。そのひとつが本ワークショップである。

2. 「問い」とは何か

広辞苑によれば、「問い」とは「①問うこと。たずねること。聞きただすこと。質問。『一を發する』②問題。設問。『後の一に答えよ』」と説明がある。問う側が問われる側に対してわからないことを尋ねる際に使われる、広辞苑の①にあるような「質問」はインタビューなどで広く一般的に用いられており、こちらをまずは想起する人も多いだろう。安齋(2021)によれば、この際の「質問」は、「『相手のなかに引き出すべき情報がある』という前提」で行われる手法のことである。また広辞苑での記述を踏まえて教育現場である学校の授業などに当てはめて考えると、教師が子どもたちに対して尋ねる「発問」を思い浮かべる人も少なくないだろう。安齋(2021)によれば、「学校教育における発問というのは、基本的に『答え(知識としての正解や、考えを深めるべきこと)を知っている教師』が、『答えを知らない生徒』に対して、投げかける問いの工夫によって考えさせ、答えに到達させるための手段」としている。しかし今回のワークショップで扱う「問い」は、インタビューなどで用いる「質問」とも、授業で教師が子どもに対して用いる「発問」とも異なり、問う側も問われる側も答えを知らない状態にあって「創造的対話を通して向かうべきゴールを探りあてていくため

*会津若松市地域学校協働活動推進員 **福島県立博物館

の手段」として位置づけられていることが最大の特徴である（質問・発問・問いのそれぞれの違いについては 表1 質問と発問との比較整理 を参照）。

表1 質問と発問との比較整理
(筆者作成 安斎2021より引用)

	問う側	問われる側	機能
質問	答えを知らない	答えを知っている	情報を引き出すトリガー
発問	答えを知っている	答えを知らない	考えさせるためのトリガー
問い	答えを知らない	答えを知らない	創造的対話を促すトリガー

3. 「問い」と主体的・対話的で深い学びとの関連性

文部科学省（2017）では、平成29年度より改訂された新学習指導要領の中で「主体的・対話的で深い学びの実現」について言及しており、子どもたちは、従来よりも主体的に学ぶことや、学級やグループの中で協働的に学ぶことの重要性が指摘されている。塩瀬（2016）は、「『よい問い』は、自分事として深く考えられるものであり、しっかりデザインできていれば、問われた側が心地よく、答えたいと思うもの」としている。また前述の安斎（2021）のように「問い」が「創造的対話を通して向かうべきゴールを探りあてていくための手段」として位置づけられていることを考えると、しっかりデザインされた「問い」を授業で活用することで、「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」の実現が可能であるとも言える。また、自分ごととして捉え対話を通して深く学びあうことは、災害に対する「わがこと感」、つまり防災への意識を高めることもできるため、防災学習とも親和性が高い。「問い」を活用することは、アクティブ・ラーニングを展開することに役立つだけでなく、防災意識の向上に関しても非常に有効的な手法であると言える。

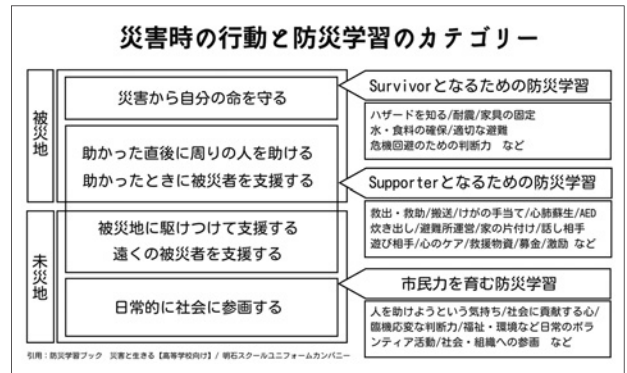
4. 実施概要

令和4年2月12日、福島県立博物館主催で「震災遺産を活用した授業づくり 子ども防災力を育む問いをつくろうー博物館の展示資料からー」と題し、オンライン（WEB会議サービスZoomを使用）にてワークショップ形式の講座を実施した。参加者は13名で、小・中・高校の学校職員（OBも含む）や教育事務所職員、自然学校職員などの教育関係者が大半である。居住地は、福島県内11名、宮城県1

名、滋賀県1名と、遠方からの参加者も見受けられたのがオンライン開催ならではの点もいえる。また筆者自身が新潟県で活動していた際にお世話になった新潟市小学校教員よりZoomにおけるテクニカルサポーター、そしてワークショップでの話し合いを進めるサブファシリテーターとしてご協力をいただいた。

講座では、参加者の自己紹介から始め、防災にまつわる簡単なクイズに挑戦した後、ワークショップの導入として、災害を自分ごととして捉えることが子どもの防災力を育むことにつながることを、災害時の行動と防災学習のカテゴリーの表を用いて説明した（表2 災害時の行動と防災学習のカテゴリー参照）。

表2 災害時の行動と防災学習のカテゴリー
(筆者作成・明石スクールユニフォームカンパニー2019より引用)



その後、前述の「ライブいわきミュウじあむ」に展示されていた「いわきの東日本大震災展」を展示資料と問いの例示として取り上げ、福島県立博物館で展示された震災遺産についての解説を行なった。講座で活用した資料は「その1：アリーナに落下した体育館照明」「その2：スティックパン」「その3：みんなの夢」「その4：牛がかじった牛舎の柱」の4つである（写真と解説は 表3 ワorkshopで使用した震災遺産 を参照）。

ワークショップでは、この4つの資料に関して著者の一人筑波が解説した後、まずは個人ワークで4つの資料に対してそれぞれ子どもの防災力を育む問いを考えてもらった。個人で問いを考えてもらった後に4-5人の3グループに分かれてZoomのブレイクアウトルームに入室してもらい、それぞれ4つの資料に対して「どのような問いを考えたのか」そして、その問いに對峙することで「どんなことを子どもたちに考えてほしいのか」を同じグループのメンバーに共有するグループワークを行なった。Google slideを用いて、各個人の考えた問いと子どもたちに考えてほしいことを参加者から聞き取り、

各グループのファシリテーターが一覧表に書き込んでいくという方法でグループ内の共有を行なった。その後ギャラリーウォーク（休憩含む）と題して、自分のグループ内のみならず、他のグループの参加者が作った問いが記入されているスライドを見る時間を10分弱設けた。ギャラリーウォークの後は、今度は2人1組のペアに分かれてブレイクアウトルームに入室し、お互いの考えた問いやこれまでの気づ

きなどを共有する時間とした（4分）。ペアワーク後に、再び元の3グループに戻り、良いと思った問いを発表しあったり、作った問いにみんなで答えたり、またこの問いからどんな授業展開ができそうかなど、新たに浮かんできた気づきや話し合ってみたテーマについて対話をする時間を20分ほど設けた。最後に参加者全体で本日の感想や気づき、明日から活かしていきたいことなどを意見交換した。

表3 ワークショップで使用した震災遺産

資料No.	資料名	資料の解説	資料の写真
その1	アリーナに落下した体育館照明	富岡高校の新体育館はバドミントンの全国強豪校にふさわしくコートを8面とることのできる建物である。バドミントンの練習中に地震が発生し、天井に設置されていた照明が次々に落下した。生徒はそれを避けながら屋外へ避難した。	
その2	スティックパン	「福島市災害時応急救援備蓄物資」として2006年に福島北高校に納入されたもの。賞味期限は2013年3月まで。同校が避難所として使われた際に食料として一部配布された。防災用非常食としてつくられた商品で、同じ物が富岡高校にもみられたことから、広域にわたり準備されていた備蓄品であったことが分かる。	
その3	みんなの夢	学校の再開が決まったため、4月14日に中村神社で花見をして旧相馬女子高避難所の臨時学級は解散となった。それにともない、子どもたちは桜の絵とそれぞれの「夢」を書いた。遠い将来の目標より、あたりまえの日常を取り戻すことが当時の子どもたちの願いであった。	
その4	牛がかじった牛舎の柱	牛舎の柱は痩せ細っており、横から見ると柱として辛うじて保たれているのが分かる。牛舎に残され餌をもらえない牛が空腹に耐えかねて柱を齧ったもの。本震災は動物やそれを生業とする人にも大きな影響を与えた。	

表4 ワークショップで考えられた「問い」と「子どもたちに考えてほしいこと」(抜粋)

資料No.	資料名/写真	考えられた「問い」	子どもたちに考えてほしいこと
その1	 <p>アリーナに落下した 体育館照明</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 当たり前になっていたことが突然できなくなったら？ 2. 前提が変わったとき、どんな風に気持ちを切り替えますか？ 3. 地震の時に部活動が行われていた生徒たちはどうしたのだろうか？ 4. あなたの家の落ちるはずがないもの、倒れるはずがないものはなんですか？ 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 安心して過ごすために、どうしたらよいか？と考えてほしい 2. 自分で身を守る態度 3. 小中学生は当たり前で体育館で部活動をするが、この状況に身をおいたとき、次にどんな行動をすべきか予想ができるはず。体育館でも安全ではない。 4. まさか落ちないだろうという避難所にもなる体育館の照明が落ちているので、まさかというものが家にないか再度確認してほしい。
その2	 <p>スティックパン</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 苦手なものがでてきても、食べることができますか？ 2. ①200人の避難者に50本のスティックパンが届いた。どう配る？②避難所でスティックパンが余った。どうする？ 3. なぜパンは配られなかったのか？ 4. うちにある非常食をいくつ挙げられますか？ 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 食で命をつなぐ。苦手なものも食べられる。 2. ①平等とは何か？②食の大切さ 3. なぜ配られなかったのかを考えてほしい。アレルギー、賞味期限から後回しにされた。水、飲み物が無くて食べられなかった？備蓄に向いているか？ 4. 自分の家の中にある食糧に気づかせる。
その3	<p>みんなの夢</p> 	<ol style="list-style-type: none"> 1. どんな子どもたちがこれを書いたと思いますか？ 2. 当たり前だと思うものはいくつ？ 3. 「友だちに会いたい」というのは「夢」ですか？ 4. 今の自分の夢はなんですか？それはなぜですか？ 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 被災した子どもたちがこれを書いた。被災した子の思いを想像させたい。 2. 当たり前だと思っても、非常時にはそれが一番切実に思うもの。なくしてはいけないものに気づいてほしい。 3. 日常から離れてしまったが故に、日常が夢になってしまう現実を察する。 4. どういった状況で、こういう夢を考えたのか考えさせたい。
その4	 <p>牛がかじった牛舎の柱</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1. 牛はどうして独りぼっちだったのだろう 2. かけがいのない家族を置いてにげられますか？ 3. 牛たちを助けることも殺すこともできなかったのはなぜでしょうか？ 4. 牛さんは、どんな気持ちだったのかな？ 	<ol style="list-style-type: none"> 1. 災害の時、動物のことって意外とぬけている。 2. 家畜だが家族。ずっと一緒に過ごしてきた家族を逃げられるか、震災の悲惨さを考えてほしい。 3. 原子力災害の不条理を考えてもらう。 4. 人だけでなく動物たちも被害にあったことを考えさせたい。

5. 参加者が考えた「問い」と「子どもたちに考えてほしいこと」

今回の講座で用いた4つの震災遺産に対して、参加者はどのような「問い」を考えたのか、またその問いに対峙してもらうことで「子どもたちにどんなことを考えてほしいのか」についてワークショップで出されたもののうち、特徴的なものを取り上げた(表4 ワークショップで考えられた「問い」と「子どもたちに考えてほしいこと」(抜粋)を参照)。

6. 参加者が考えた「問い」に関する考察

①資料その1

「アリーナに落ちてきた体育館照明」に関する問いでは、当初は落下してくるものからどのように身を守るのかという自助にまつわる問いが多く出るのかと予想していた。しかし、当たり前を過ぎしている日常について改めて考えさせたり、部活動をしていた生徒の行動について考えさせたりする問いが目立った。学校関係の震災資料だけでなく、参加している多くの小中学校の教員にとっては子どもと災害を結びつけることが比較的容易な資料であったとも考えられる。

②資料その2

「スティックパン」に関しても、家庭での食料備蓄の見直しなどにまつわる問いが多くなると思われたが、避難所で苦手なものが出てきても食べられるのか、また自分が支援者だったら食料が不足している場合にどのような対応をするのかといった「問い」や、「なぜパンは配られなかったのか」という災害時に食料を供給する際の課題に目を向けさせる問いが出てきていることが興味深い。食糧の資料からは、備蓄だけでなく避難所運営上の課題に関する問いも出され、一つの資料から複数の視座で物事を考えられるということに改めて気づかされた。

③資料その3

「みんなの夢」では、自分で自分の身を守る狭義の防災概念というよりは、被災してしまった人の気持ちを想像させるような直接的な投げかけや、自分の夢や気持ちと比較して被災者の気持ちを想起させるような問いがほとんどを占めた。先に紹介した「表2：災害時の行動と防災学習のカテゴリー」を用いて、自らが被災をしていない地域に住んでいたとしても「遠くの被災者を支援すること」も被災地にいる人間ができる災害時の行動として含まれることを、ワークショップの冒頭で事

前説明していたこともあり、遠くの被災者の気持ちを慮るような問いや、また自らの日常生活で当たり前に行っていることが当たり前でなくなる状況を意識させるような「問い」が特徴的であった。

④資料その4

「牛がかじった牛舎の柱」では、東日本大震災は人間だけでなく動物も被災せざるを得ない状況が発生してしまったために、子どもたちにどう考えさせたいのかかわからず、問いを作ることが難しかったとの声も多く聞かれた。しかし当資料は、福島県での原発事故を考えるのに象徴的な資料であり、「問い」をきっかけに創造的な対話が生まれやすい資料ともいえる。

7. 終わりに

ワークショップでは、一つの資料を取り上げてみても、様々な視座による問いが見受けられた。個人によって資料の捉え方や、また同じ問いでも答える人によって多様な受け答えがあり、その後も創造的な対話が生まれる豊かな時間となった。このようにワークショップで他者と考えを共有することで、個人の考えを深めることにつながり、参加者の防災に対する意識をも高めることができたのではないかと思う。

また、「問い」そのものを子どもたち自身に考えてもらうという授業展開も考えられる。鹿嶋・石黒(2018)では、「問い」を創る授業で子どもたちに身につく力として「主体的・意欲的な態度」「問う力」「自己の価値観の形成・判断力」「メタ認知」「学び方のスキル」「質問の仕方・調べ方」を挙げている。文部科学省(2015)で「新しい時代に必要となる資質・能力の育成」において記述している「主体的に学習に取り組む態度も含めた学びに向かう力」や「メタ認知」といった力ともリンクしている。

また今後は、福島県立小高産業技術高等学校の「地理総合」科目において、このワークショップで考えられた「問い」に答え、4つの震災資料から1つを選んで自ら「問い」を創るという授業を実施する。相双地区に住む高校生だからこそその多様な「問い」が生まれ、自らの地域について知り、創造的な対話が生まれる豊かな学びの時間になることを期待している。

参考文献

安斎勇樹(2021)「デザインした「問い」の答えは誰が持っているのか：質問と発問との違い」
<https://www.cultibase.jp/articles/4123>

- 鹿嶋真弓・石黒康夫（2018）「問いを創る授業」／図書文化社.
- 前林清和・諏訪清二（2019）「高等学校向け 防災学習ブック『災害と生きる』」／明石スクールユニフォームカンパニー.
- 文部科学省（2015）「総合的な学習の時間について」.
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/064/siryu/_icsFiles/afiedfile/2016/01/07/1365764_3.pdf
- 文部科学省（2017）「新しい学習指導要領の考え方－中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ－」.
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/_icsFiles/afiedfile/2017/09/28/1396716_1.pdf
- 塩瀬隆之（2016）「問いのデザイン」でアクティブラーニングの種を育てる.
https://berd.benesse.jp/feature/focus/14-design_AL/activity1/